

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

ライフ・オブ・デビッド・ゲイル

配給/UIP

2003 (平成15年) 8月18日鑑賞

Data

監督: アラン・パーカー

出演: ケビン・スペイシー/ケイト・ウィンスレット/ローラ・リニー/ガブリエル・マン

👁️👁️ みどころ

死刑制度の是非論をサスペンスタッチで描く社会派ドラマ。「殺人犯」の大学教授(ケビン・スペイシー)は、女性記者(ケイト・ウィンスレット)を指名し、死刑執行直前の3日間に彼が語る話をまとめることを依頼した。そこにあらわれる驚愕の事実とは・・・?執行された死刑は取り戻すことが不可能。そんな当たり前のことの重みがズッシリと……。法科大学院(ロースクール)の教材に格好の一作だ。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<前から観たかった社会派ドラマ>

この『ライフ・オブ・デビッド・ゲイル』は死刑制度の是非をテーマとした硬派の社会派ドラマとして評判の高かったもの。主演は、2000年の『アメリカン・ビューティー』でアカデミー主演男優賞を獲得した他、『評決のとき』(96年)、『L. A. コンフィデンシャル』(97年)、『交渉人』(99年)、『シッピング・ニュース』(01年)など、多数の作品でおなじみの大俳優ケビン・スペイシー。そして、あの『タイタニック』(97年)でアカデミー主演女優賞にノミネートされ、最近では『クイルズ』(00年)、『エニグマ』(01年)等で活躍しているケイト・ウィンスレットがそのお相手。この演技派の2人が、英国生まれの異色監督アラン・パーカーの下で、死刑制度の是非という社会的テーマを真正面に据えた作品に出演するといふのだから、期待は高まって当然。そんな映画を私は、打ち切りの3日前にやっと観ることができた。予想通り(?)観客はまばら。それでも3分の1程度は入っていることに一安心。

＜死刑制度の現状＞

以下、パンフレットの引用による死刑制度の現状の報告。

2003年4月現在、死刑を廃止している国は112ヶ国。死刑制度のある国は、アメリカ、日本を含め83ヶ国とのこと。アメリカでは、1967年から10年あまり、死刑制度の是非が裁判で争われ、この間は一度も執行されなかった。そして1972年、アメリカの最高裁は死刑は「残酷で異常な刑罰」として憲法違反との判断を下した。しかし、1976年には最高裁が判断を覆し、死刑は38州で復活したとのこと。そして、2002年までにアメリカでは807件の死刑が執行され、その3分の1はこの映画の舞台となっているテキサス州で行われたとのことだ。

なお、アメリカの現大統領のブッシュ氏は元テキサス州知事だが、その在任中に死刑執行に最多の署名をしたとのことだ。さらに、この作品の監督のアラン・パーカーは、死刑反対の立場をとっているとのこと。

＜女性記者の御指名＞

女性記者ビッツィー（ケイト・ウィンスレット）は、死刑が確定したデビッド・ゲイル（ケビン・スペイシー）から名指しの指名を受けた。そして、死刑執行直前の3日間に、1日2時間ゲイルの話を聞き、手記をまとめるように依頼された。その報酬はなんと50万ドル。なぜ自分が指名されたのかもわからないままビッツィーはこれを受けたが、ボスは助手としてザック（ガブリエル・マン）を同行することを命じた。「単独取材」が信条のビッツィーはこれに異を唱えたが、結果的には、ザックの応援は大きな支えとなった。

ビッツィーは直ちにゲイルが収監されている刑務所に赴き、ゲイルの話を聞き始めた。そして、そこには驚くべき真実が・・・。

＜主人公は大学教授＞

主人公ゲイルは、大学で哲学を教えている教授で、死刑廃止論者。結構人気のある講義をしているし、死刑制度の是非についてテレビに出演し、州知事と激論を闘わせるほどの理論派。しかし、ちょっと自信過剰気味、また、感情に動かされ気味なところが気になるところ・・・。そんなゲイルは、単純に仕掛けられた女子学生の罠に陥り、レイプ犯に。「誘惑された・・・」と言っても、そんな弁解が通るような職場じゃないことは本人が一番わかっているはず。ちょっとガードが甘すぎる・・・。

女子学生の告訴は取り下げられたものの、いったん貼られた「レイプ魔」というレッテルはついて回り、遂に大学をやめる羽目に。そこに妻との不和。もっとも、これはもともと妻の不倫が原因だったが、レイプ魔とされた今、ゲイルはこれに対抗できない。愛する息子も妻に奪われ、妻はマドリードの男のところへ飛んでいった。こんな踏んだり蹴ったりの中、ゲイルは酒に溺れていった・・・。

<同僚のコンスタンス>

こんなゲイルを支え、見守ったのは大学の同僚のコンスタンス（ローラ・リニー）。死刑廃止論者であり、かつ、熱心な運動家である彼女は、ゲイルをその運動に誘った。コンスタンスに支えられながら、ゲイルは娯楽酒会に通い、死刑廃止運動に入っていき、「レイプ犯」のレッテルを貼られたゲイルの存在は、運動団体にとってもマイナス。ある日、直接そんな声を聞かされたゲイルは再び絶望し、荒れ狂った。その翌朝、ゲイルはコンスタンスが白血病であり、余命いくばくもないことを知った。2人の語らいの中、2人は・・・。

<コンスタンス殺人事件>

ゲイルが起訴され、殺人罪となったのは、コンスタンス殺人事件。後ろ手に手錠をかけられ、その錠を飲み込まされた上、裸で殺されたコンスタンスの体内にはゲイルの精液が。そして、顔にかぶせられたポリ袋にはゲイルの指紋が。これでは、ゲイルが犯人とされるのは当然だ。しかし、殺人現場にはなぜか「三脚」が置かれていた・・・。

当初、ゲイルの有罪を当然のことと考えていたビッツィーの頭には、刑務所内でのゲイルからの「聞き取り」の中で数々の疑問点が浮かんできた。そして、自分たちにつきまとっている謎の車とそれを運転するカーボーイ風の男も不気味。さらには、ビッツィーとザックが宿泊していたモーテルの部屋には誰かが密かに侵入し、コンスタンス殺害の様子が記録した生々しいビデオテープが置かれていた。これは一体何を意味するのか・・・？

<難しい謎解きスリラー>

物語は、1日目、2日目、3日目、そして死刑執行の日の4日目と、着実に進行しながら、他方、回想シーンの中でうまくストーリーをつないでいる。ビッツィーによるゲイルからの聞き取りの中で、ゲイルの大学での講義やパーティーの様子、そして女子学生へのレイプ、妻との離婚騒動、コンスタンスとのつながり等たくさんの場面がスクリーン上で展開される。しかし、なぜコンスタンスが殺されたのか？あるいは、なぜゲイルがコンスタンスを殺したのか？これについての謎は一向に解けそうにない。そんな中、死刑執行の4日目になって、ビッツィーはビデオの中のコンスタンスの動きに不自然な点があることに気がついた。そして、自ら口にテープを巻き、ポリ袋をかぶり、後ろ手に手錠をかけるという命がけの「実験」をしたビッツィーは、「コンスタンスは殺されたのではなく、自殺だったのだ！」と気づく。しかし、なぜ・・・？

<緊張感のあるラスト数分の展開>

ゲイルの死刑執行は4日目の午後6時。プラカードを掲げた多くの死刑賛成派と反対派の運動団体が対峙する中、ゲイルの死刑が執行されたことが告げられた。しかし、その後、ビッツィーが謎のカーボーイ男から奪ったもう1つのビデオテープから、コンスタン

スは殺されたのではなく、自殺だったことが判明した。

すると、ゲイルの殺人罪は冤罪・・・？ゲイルの死刑は間違い・・・？しかし、ゲイルは既に死亡・・・！まさに、死刑制度の是非論をめぐる最も本質的な論点が現実問題として浮上してきたわけだ。懸命に弁明する州知事。しかし・・・。

このスリルある最後のサスペンスは見モノ。死刑制度の是非を考える上で、この映画は絶好の素材だ。2004年4月に開校される全国の法科大学院（ロースクール）の刑法学習の素材として、この映画を学生に観せることを是非提案したい。

2003（平成15）年8月19日記